1．調査地遠景（調査前，西から）

2．調査地遠景（１区調査後，西から）

巻頭図版 2

1．1区北側完掘状況（俯瞰）

2．SI8完掘状況（南西から）

1．SI3炭化材検出状況（南西から）

2．SI3炭化材検出状況（東から）

巻頭図版 4

１．SI3焼土検出状況（南西から）

２．SI3南壁炭化材検出状況（北から）

1．SI3南西床面炭化材検出状況（西から）

2．SI3西側炭化材検出状況（北東から）

3．SI3被熱礫出土状況（南西から）

巻頭図版 6

1．SI6遺物出土状況（東から）

2．2区完掘状況（南から）

鳥取県埋蔵文化財センター調査報告書　12

一般国道９号（東伯中山道路）の改築に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書XVI

鳥取県東伯郡琴浦町

箆津乳母ヶ谷第2遺跡1

NO TSU U BA GA DANI

２００７

鳥取県埋蔵文化財センター
国土交通省　倉吉河川国道事務所

序

一般国道９号東伯中山道路の改築に伴う発掘調査は、平成１４年度から行われ、平成１７年度末時点で遺跡数は２３遺跡、調査面積は延べ１８万平方メートルに及んでいます。

この発掘調査は、平成１７年度から鳥取県直営の事業となり、鳥取県埋蔵文化財センターが担当することとなりました。

そのうち、琴浦町にある箆津乳母ヶ谷第２遺跡では、弥生時代から古墳時代にかけての集落跡など、この地域の歴史を解明するための重要な資料を確認することができました。直径９メートルに及ぶ大型の竪穴住居跡や、建築部材のあり方を教えてくれる焼失住居など、まさに歴史の証人といえるでしょう。本書はその調査結果を報告書としてまとめたものです。

この報告書が、郷土の歴史を解き明かす一助となり、埋蔵文化財が郷土の誇りとなることを期待しております。

埋蔵文化財センターでは発掘調査により明らかとなった遺跡や出土品を活用し、その普及啓発に努めることも重要な業務としております。

箆津乳母ヶ谷第２遺跡についても、県内のショッピングセンターや道の駅で出土品の展示公開を行い、多くの方々にその素晴らしさを実感していただきました。

本書をまとめるにあたり、国土交通省倉吉河川国道事務所、地元関係者の方々には、一方ならぬ御指導、御協力を頂きました。心から感謝し、厚く御礼申し上げます。

平成１９年１月

鳥取県埋蔵文化財センター

所長　久 保 穣 二 朗

序　文

一般国道９号は、起点の京都府京都市から山口県下関市にいたる、総延長約691㎞の幹線道路であり、西日本日本海沿岸地域の産業・経済活動の大動脈として、地域住民の生活と密着し大きな役割を果たしています。

このうち、国土交通省倉吉河川国道事務所は、東伯郡湯梨浜町から米子市（鳥取ー島根県境）までの76.6㎞を管轄しており、時代の要請に沿った各種の道路整備事業を実施しているところです。

東伯中山道路は、東伯郡琴浦町から西伯郡大山町にかけての、国道９号の渋滞緩和、荒天時の交通障害の解消、また、災害時の緊急輸送の代替道路確保、などを目的として計画された一般国道９号（自動車専用道路）であり、鋭意事業に着手しているところです。

このルートには、多数の埋蔵文化財包蔵地がありますが、鳥取県教育委員会と協議を行い、文化財保護法第94条の規定に基づき、鳥取県教育委員会教育長に通知した結果、事前に発掘調査を実施し、記録保存を行うこととなりました。

平成17年度は、「梅田萱峯遺跡」、「箆津乳母ヶ谷第２遺跡」、「南原千軒遺跡」の３遺跡について鳥取県教育委員会と発掘調査の委託契約を締結し、鳥取県埋蔵文化財センターによって発掘調査が行われました。

本書は、上記の「箆津乳母ヶ谷第２遺跡」の調査成果をまとめたものです。この貴重な記録が、文化財に対する認識と理解を深めるため、ならびに、教育及び学術研究のために広く活用されることを願うと同時に、国土交通省の道路事業が、文化財保護に深い関心を持ち、記録保存に努力していることをご理解いただければ幸いと存じます。

事前の協議をはじめ、現地での調査から報告書の編集にいたるまで御尽力いただいた鳥取県教育委員会の関係者に対して、心から感謝申し上げます。

平成１９年１月

国土交通省　倉吉河川国道事務所

所　長　嘉 本 昭 夫

例　言

１．本報告書は、国土交通省中国地方整備局倉吉河川国道事務所の委託により、鳥取県埋蔵文化財センターが、一般国道９号（東伯中山道路）の改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査事業として、平成17年度に行った箆津乳母ヶ谷第２遺跡の発掘調査報告書である。

２．本報告書に収載した遺跡の所在地および調査面積は以下の通りである。
箆津乳母ヶ谷第２遺跡：東伯郡琴浦町大字箆津字赤坂谷平1087－11外　　調査面積4,500㎡

３．本報告書で示す標高は、２級基準点H10－2－9を基準とする標高値を使用した。方位は公共座標北を示す。なお、X：、Y：の数値は世界測地系に準拠した公共座標第Ⅴ系の座標値である。

４．本報告書に掲載した地形図は､国土地理院発行の1/50,000地形図｢赤碕｣｢伯耆浦安｣を使用した。

５．本報告にあたり、出土石製品の石材鑑定を鳥取大学名誉教授の赤木三郎氏に、焼失住居の調査について現地指導を鳥取環境大学環境デザイン学科教授の浅川滋男氏に依頼した。明記して深謝いたします。

６．本報告にあたり、調査前･調査後航空写真撮影、調査前地形測量、調査後地形測量、出土炭化材等の^{14}C年代測定、樹種同定、種実同定、石材産地同定、胎土分析を業者委託した。

７．本報告書に掲載した遺物の実測･浄書は、埋蔵文化財センターおよび東伯調査事務所で行った。

８．本報告書で使用した遺構･遺物写真は文化財主事が撮影した。

９．本報告書の編集・執筆は大川泰広、濵本利幸が分担し、目次に文責を記した。

10．発掘調査によって作成された図面･写真などの記録類、出土遺物は鳥取県埋蔵文化財センターに保管されている。

11．現地調査および報告書作成にあたっては、下記の方に御指導･御協力いただいた。記して深謝します。（敬称略）
　琴浦町教育委員会、高田健一

凡　例

1．遺物の註記における遺跡名には「ノツ」を略号として用いた。

2．本報告書で用いた遺構の略号は以下の通りである。
SI：竪穴住居跡　SB：掘立柱建物跡　SK：土坑　SS：段状遺構　P：柱穴･ピット

3．遺構図・遺物実測図の縮尺については、特に説明がない限り以下の通りである。
竪穴住居跡･段状遺構･掘立柱建物跡：1/60，1/80　土坑：1/60　土器：1/4
石器･石製品：1/2，2/3　鉄製品：1/2

4．遺構図･遺物図に用いたスクリーントーンおよび記号は､特に説明がない限り以下の通りである。
また、遺物実測図の断面は須恵器を黒塗りとし、それ以外のものは白抜きで示した。
地山　貼床　焼土・焼土面　炭化物層　赤彩土器　石器磨り範囲
石器被熱範囲
S：石器･石製品　F：鉄製品　●：土器　○：石器･石製品　▲：鉄器･鉄製品

5．法量記載における※は推定復元値、△は現存値を示す。

6．発掘調査時において付していた遺構番号を以下のように変更した。

報告時遺構名	調査時遺構名	報告時遺構名	調査時遺構名	報告時遺構名	調査時遺構名
SI1	SI7	SB1	SB9	SK4	SK10
SI2	SI8	SB2	SB10	SK5	SK4
SI3	SI5	SB3	SB8	SK6	SK5
SI4	SI6	SB4	SB2	SK7	SK8
SI5	SI4	SB5	SB3	SK8	SK11
SI6	SI9	SB6	SB4	SK9	SK15
SI7	SI12	SB7	SB5	SK10	SK3
SI8	SI1	SB8	SB6	SK11	SK17
SI9	SI10	SB9	SB7	SK12	SK7
SI10	SI2	SB10	SB1	SK14	SK2
SI11	S13	SK2	SK16	SK15	SK14
SI12	SI11	SK3	SK9		

7．土器の年代観は以下の文献等を参考にした。
弥生土器：清水真一　1992「因幡･伯耆地域」『弥生土器の様式と編年　山陽･山陰編』正岡睦夫･松本岩雄編　木耳社
土 師 器：牧本哲雄　1999「古墳時代の土器について」『長瀬高浜遺跡Ⅷ・園第６遺跡』鳥取県教育文化財団
土師器・須恵器：小口英一郎・北島大輔・原あづさ編　2004「八橋第８・９遺跡における６～７世紀の土器編年」『八橋第８・９遺跡』鳥取県教育文化財団

目　次

序
序文
例言
凡例
第１章　調査の経緯…… 1
　第１節　調査に至る経緯……（湯村・大川）1
　第２節　調査の経過と方法……（大川）2
　第３節　調査体制……（大川）4
第２章　遺跡の立地と環境…… 5
　第１節　地理的環境……（湯村・濵本）5
　第２節　歴史的環境……（湯村･淺田）5
第３章　調査の成果…… 9
　第１節　遺跡の立地と層序……（大川）9
　第２節　弥生時代の調査成果…… 11
　　⑴概要……（大川）11
　　⑵竪穴住居跡……（大川・濵本）11
　　⑶掘立柱建物跡……（濵本）36
　第３節　古墳時代以降の調査成果…… 39
　　⑴概要……（大川）39
　　⑵竪穴住居跡……（大川・濵本）39
　　⑶段状遺構……（大川）55
　　⑷掘立柱建物跡……（大川・濵本）58
　第４節　土坑等の調査成果…… 66
　　⑴土坑等……（濵本・大川）66
　　⑵ピットおよび遺構外の出土遺物……（大川）70
　　出土遺物観察表…… 77
第４章　自然科学分析の成果…… 84
　第１節　箆津乳母ヶ谷第２遺跡の自然科学分析……（パリノ・サーヴェイ株式会社）84
　第２節　箆津乳母ヶ谷第２遺跡における炭化種実同定……（株式会社　古環境研究所）93
　第３節　箆津乳母ヶ谷第２遺跡出土黒曜石の産地推定……（株式会社　古環境研究所）97
　第４節　箆津乳母ヶ谷第２遺跡出土サヌカイトの産地推定……（株式会社　古環境研究所）103
第５章　まとめ……（大川･濵本）105
写真図版…… 107
報告書抄録…… 156

挿図目次

第１図　東伯中山道路ルートと関係遺跡位置図…… 1
第２図　調査地位置図…… 2
第３図　遺跡位置図…… 5
第４図　周辺遺跡分布図…… 7
第５図　調査前地形測量図…… 9
第６図　調査後地形測量図…… 10
第７図　調査区基本土層図…… 10
第８図　弥生時代の遺構配置図…… 11
第９図　SI1(1) …… 12
第10図　SI1(2) …… 13
第11図　SI1出土遺物(1) …… 14
第12図　SI1出土遺物(2) …… 15
第13図　SI2および出土遺物 …… 16
第14図　SI3、4変遷図…… 17
第15図　SI3、4(1)…… 18
第16図　SI3、4(2)…… 19
第17図　SI3焼土分布 …… 21
第18図　SI3炭化材検出状況 …… 21
第19図　SI3出土被熱礫 …… 22
第20図　SI3出土遺物 …… 23
第21図　SI4出土遺物 …… 24
第22図　SI5 …… 25
第23図　SI5出土遺物(1) …… 26
第24図　SI5出土遺物(2) …… 27
第25図　SI5出土遺物(3) …… 28
第26図　SI5出土遺物(4) …… 29
第27図　SI6 …… 30
第28図　SI6出土遺物(1) …… 31
第29図　SI6出土遺物(2) …… 32
第30図　SI6出土遺物(3) …… 33
第31図　SI7 …… 34
第32図　SI7出土遺物 …… 35
第33図　SB1 …… 36
第34図　SB2 …… 37
第35図　SB3 …… 38
第36図　古墳時代以降の遺構配置図…… 39
第37図　SI8(1) …… 40
第38図　SI8(2) …… 41
第39図　SI8出土遺物(1) …… 42
第40図　SI8出土遺物(2) …… 43
第41図　SI8出土遺物(3) …… 44
第42図　SI9(1) …… 45
第43図　SI9(2) …… 46
第44図　SI9出土遺物 …… 47
第45図　SI10(1)…… 48
第46図　SI10(2)…… 49
第47図　SI10出土遺物(1)…… 50
第48図　SI10出土遺物(2)…… 51
第49図　SI11…… 52
第50図　SI11出土遺物…… 53
第51図　SI12(1)…… 54
第52図　SI12(2)…… 55
第53図　SS1 …… 56
第54図　SS1出土遺物 …… 57
第55図　SB4 …… 58
第56図　SB5および出土遺物 …… 59
第57図　SB6 …… 60
第58図　SB7 …… 61
第59図　SB8 …… 62
第60図　SB9 …… 63
第61図　SB10 …… 64
第62図　SB11 …… 65
第63図　SK1 ～ 3 …… 66
第64図　SK4 …… 66
第65図　SK5 ～ 7 …… 67
第66図　SK8 …… 67
第67図　SK9 ～ 11 …… 68
第68図　SK12、13 …… 68
第69図　SK14 …… 69
第70図　SK15 …… 70
第71図　２区ピット配置図…… 74
第72図　１区ピット配置図…… 75
第73図　ピットおよび遺構外の出土遺物…… 76
第74図　SiO_2－AlO_2散布図…… 89
第75図　長石類主要元素の散布図…… 90
第76図　有色鉱物主要元素の散布図…… 90
第77図　箆津乳母ヶ谷第２遺跡出土黒曜石判別図(1) 99
第78図　箆津乳母ヶ谷第２遺跡出土黒曜石判別図(2)100
第79図　黒曜石産地位置図……102
第80図　箆津乳母ヶ谷第２遺跡サヌカイト判別図…104

文中写真目次

写真１　SI11　土器195、196、197出土状況 …… 53
写真２　箆津乳母ヶ谷第２遺跡の炭化材(1)…… 92
写真３　箆津乳母ヶ谷第２遺跡の炭化材(2)…… 93
写真４　箆津乳母ヶ谷第２遺跡の炭化種実…… 95

挿表目次

表１　SI3出土炭化材樹種同定結果一覧 …… 20
表２　SB1ピット計測表 …… 36
表３　SB2ピット計測表 …… 37
表４　SB3ピット計測表 …… 38
表５　SB4ピット計測表 …… 58
表６　SB5ピット計測表 …… 59
表７　SB6ピット計測表 …… 60
表８　SB7ピット計測表 …… 61
表９　SB8ピット計測表 …… 62
表10　SB9ピット計測表 …… 63
表11　SB10ピット計測表 …… 65
表12　SB11ピット計測表 …… 66
表13　ピット一覧表⑴…… 71
表14　ピット一覧表⑵…… 72
表15　ピット一覧表⑶…… 73
表16　土器・土製品観察表⑴…… 77
表17　土器・土製品観察表⑵…… 78
表18　土器・土製品観察表⑶…… 79
表19　土器・土製品観察表⑷…… 80
表20　土器・土製品観察表⑸…… 81
表21　石器観察表⑴…… 81
表22　石器観察表⑵…… 82
表23　石器観察表⑶…… 83
表24　鉄器観察表…… 83
表25　箆津乳母ヶ谷第２遺跡の放射性炭素年代測定結果…… 85
表26　箆津乳母ヶ谷第２遺跡の暦年較正結果…… 85
表27　箆津乳母ヶ谷第２遺跡の樹種同定結果…… 87
表28　箆津乳母ヶ谷第２遺跡出土土器胎土の蛍光X線分析結果（化学組成）…… 89
表29　箆津乳母ヶ谷第２遺跡における炭化種実同定結果…… 96
表30　箆津乳母ヶ谷第２遺跡出土黒曜石製石器産地推定結果…… 98
表31　産地原石判別群（SEIKO SEA-2110L蛍光Ｘ線分析装置による）……101
表32　分析対象資料一覧……103
表33　原石採取地と資料数……103

図版目次

巻頭図版１　１．調査地遠景（調査前，西から）
　　２．調査地遠景（１区調査後，西から）
巻頭図版２　１．１区北側完掘状況（俯瞰）
　　２．SI8完掘状況（南西から）
巻頭図版３　１．SI3炭化材検出状況（南西から）
　　２．SI3炭化材検出状況（東から）
巻頭図版４　１．SI3焼土検出状況（南西から）
　　２．SI3南壁炭化材検出状況（北から）
巻頭図版５　１．SI3南西床面炭化材検出状況（西から）
　　２．SI3西側炭化材検出状況（北東から）
　　３．SI3被熱礫出土状況（南西から）
巻頭図版６　１．SI6遺物出土状況（東から）
　　２．２区完掘状況（南から）
PL.1　１．調査地遠景（調査前，南東から）
　　２．調査地遠景（調査前，南西から）
PL.2　１．１区調査前遠景（北西から）
　　２．２区調査前遠景（北東から）
PL.3　１．１区北側遺構面検出状況（南から）
　　２．１区遺構全景（南から）
PL.4　１．SI1東西土層断面（南東から）
　　２．SI1遺物出土状況（西から）
　　３．SI1完掘状況（東から）
PL.5　１．SI2完掘状況（北東から）
　　２．SI2遺物出土状況（南から）
　　３．SI2床面検出状況（南東から）
PL.6　１．SI3炭化材検出状況（東から）
　　２．SI3焼土検出状況（東から）
PL.7　１．SI3東側炭化材検出状況（北西から）
　　２．SI3東端炭化材検出状況（西から）
　　３．SI3南西床面炭化材検出状況（南から）
　　４．SI3南壁カヤ・垂木材検出状況（北から）
　　５．SI3北西床面炭化材検出状況（北から）
　　６．SI3西側炭化材検出状況（北から）
PL.8　１．SI3被熱礫出土状況（北西から）
　　２．SI3粘土塊（46）出土状況（東から）
　　３．SI3南壁小ピット完掘状況（北東から）
PL.9　１．SI3小ピット半裁状況（西から）
　　２．SI3南西端溝完掘状況（南から）
　　３．SI3，4完掘状況（東から）
PL.10　１．SI5検出状況（南西から）
　　２．SI5遺物出土状況（北から）
　　３．SI5完掘状況（東から）
PL.11　１．SI6検出状況（西から）
　　２．SI6東西ベルト土層断面（南から）
　　３．SI6中央ピット上部遺物出土状況（東から）
　　４．SI6中央ピット完掘状況（北西から）

５．SI3、4完掘状況（東から）
PL.12 １．SI7東西ベルト土層断面（南から）
２．SI7南北ベルト土層断面（西から）
３．SI7完掘状況（北西から）
PL.13 １．SI8北東床面直上遺物出土状況（南西から）
２．SI8遺物出土状況（南西から）
３．SI8甕（131）出土状況（南東から）
４．SI8床面遺物出土状況（南東から）
５．SI8完掘状況（北から）
PL.14 １．SI9検出状況（西から）
２．SI9遺物出土状況（東から）
３．SI9甕（165）出土状況（北から）
４．SI9土器出土状況（西から）
PL.15 １．SI9甕（169）出土状況（北東から）
２．SI9甕（171）出土状況（東から）
３．SI9完掘状況（東から）
PL.16 １．SI10完掘状況（北から）
２．SI11完掘状況（東から）
３．SI12完掘状況（西から）
PL.17 １．SS1完掘状況（北から）
２．SB1完掘状況（北西から）
３．SB2完掘状況（北西から）
PL.18 １．SB3完掘状況（東から）
２．SB4完掘状況（西から）
３．SB5完掘状況（西から）
PL.19 １．SB6完掘状況（東から）
２．SB7完掘状況（東から）
３．SB8完掘状況（西から）
４．SB9完掘状況（東から）
５．SB10完掘状況（北から）
PL.20 １．SB10ピット内出土礎盤石（東から）
２．SK1完掘状況（北から）
３．SK2完掘状況（西から）
４．SK3完掘状況（北から）
５．SK4完掘状況（北東から）
６．SK5完掘状況（東から）
PL.21 １．SK6完掘状況（北西から）
２．SK7完掘状況（北東から）
３．SK8完掘状況（東から）
４．SK9完掘状況（南東から）
５．SK10完掘状況（北から）
６．SK11完掘状況（東から）
PL.22 １．SK12完掘状況（南から）
２．SK13完掘状況（東から）
３．SK14完掘状況（南西から）
４．SK15完掘状況（西から）
５．２区完掘状況（南から）
PL.23 SI1出土遺物⑴
PL.24 SI1出土遺物⑵
PL.25 １．SI1出土遺物⑶
２．SI2出土遺物
PL.26 １．SI3，4出土遺物
２．SI3出土粘土塊・土玉
PL.27 SI5出土遺物⑴
PL.28 SI5出土遺物⑵
PL.29 SI5出土遺物⑶
PL.30 １．SI5出土遺物⑷
２．SI5，6出土遺物
PL.31 SI6出土遺物⑴
PL.32 SI6出土遺物⑵，SI7出土遺物
PL.33 SI8出土遺物⑴
PL.34 SI8出土遺物⑵
PL.35 １．SI8出土遺物⑶
２．SI9出土遺物⑴
PL.36 SI9出土遺物⑵
PL.37 SI10出土遺物⑴
PL.38 SI10出土遺物⑵
PL.39 SI11出土遺物
PL.40 １．SS1出土遺物⑴
２．SI12，SS1出土遺物
３．SS1出土遺物⑵
４．SB5，SK14出土遺物
５．SS1出土遺物⑶
６．SI1，4，7，10，SK14出土縄文土器
PL.41 １．剥片石器⑴
２．剥片石器⑵
PL.42 １．敲石
２．磨石，砥石，台石
PL.43 １．石斧，石錘
２．SI3出土被熱礫
PL.44 １．鉄器１
２．鉄器１　X線写真
PL.45 １．鉄器２
２．鉄器２　X線写真
PL.46 １．鉄器３
２．鉄器３　X線写真
PL.47 １．鉄器４
２．鉄器４　X線写真

第１章　調査の経緯

第１節　調査に至る経緯

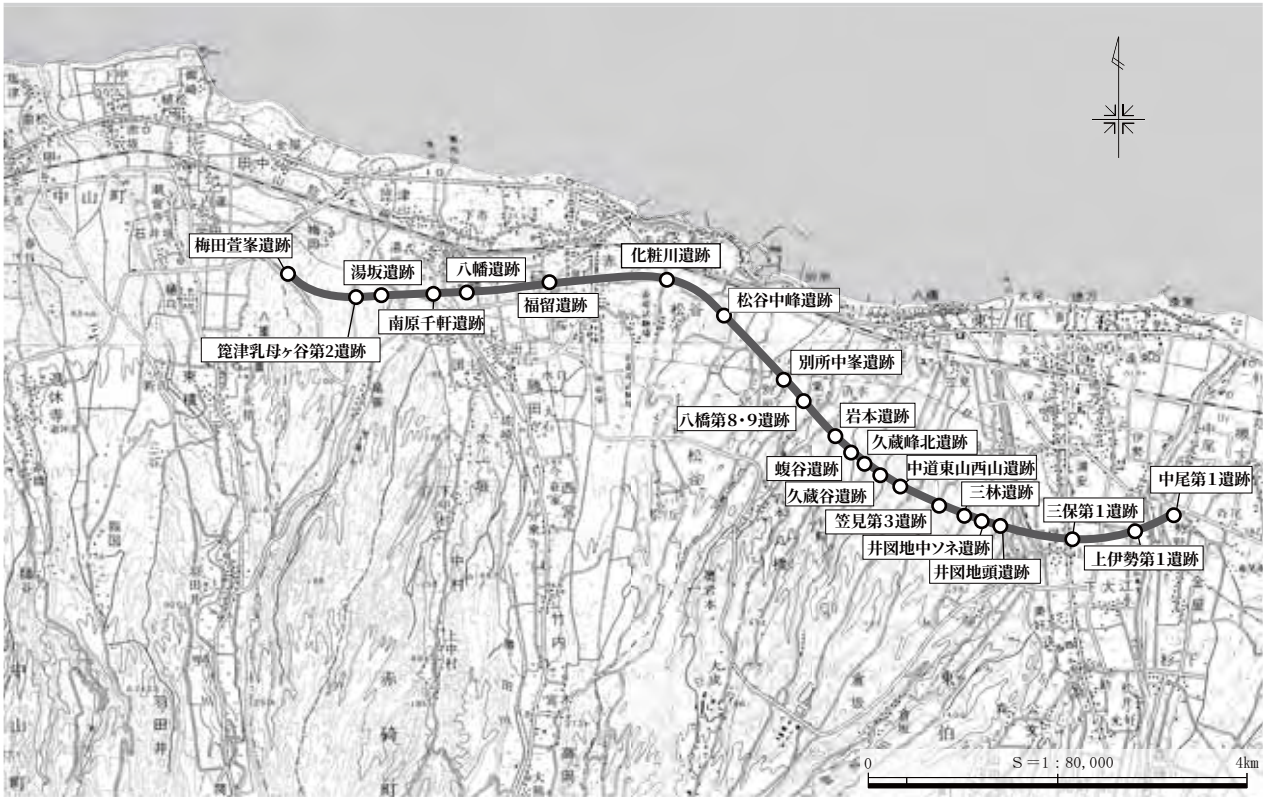
山陰地方を東西に貫く国道９号線は、交通混雑の緩和を図ることに加え、将来の国土幹線道路としての役割を果たすべく、山陰自動車道の整備事業が進められている。鳥取県中部地域では、東伯中山道路、北条道路、青谷羽合道路が自動車専用の高規格道路として計画され、一部供用開始された区間もある。

このうち東伯中山道路の計画地内には多数の遺跡があり、平成11年度からの地元教育委員会による試掘調査を経て、平成14年度から本格的な発掘調査が行われている。その延べ面積は平成17年度末現在で約180,000m^{2}となっている（第１図）。

箆津乳母ヶ谷第２遺跡は、周知の遺跡として登録されているもので、平成11年度および15年度に試掘調査が行われた[註1]。試掘調査では竪穴住居跡や土坑が確認されたほか、弥生土器、須恵器等が出土し，丘陵一帯に縄文時代の落とし穴や，弥生時代から古墳時代にかけて形成された集落跡が広がっていることが予想された。

この結果を受けて、国土交通省中国地方整備局倉吉河川国道事務所と鳥取県教育委員会が遺跡の取り扱いに関する協議を行い、文化財保護法に基づく手続きを経て、平成17年度に鳥取県埋蔵文化財センターが発掘調査を行った。本発掘の調査面積は４,500m^{2}である。　（湯村・大川）

註１　武尾美則・石賀　太編2002『赤碕町内遺跡発掘調査報告書Ⅷ』赤碕町教育委員会
　　小泉　傑・石賀　太編2004『赤碕町内遺跡発掘調査報告書Ⅸ』赤碕町教育委員会



第１図　東伯中山道路ルートと関係遺跡位置図

第２節　調査の経過と方法

（１）調査区の名称と調査方法

篭津乳母ヶ谷第２遺跡の発掘調査は６名の調査員のうち、大川・濵本の２名が担当した。調査対象地は東西に長い長方形であり、調査地中央を町道梅田尾張線が南北に通っている。この町道によって分けられた調査地東側を１区，西側を２区と呼称した。

当初、調査によって生じた排土は、調査地外の東西に伸びる谷部に仮置きする予定であったが、調査地内に仮置きし､場外搬出することとなった。このため１区､２区をそれぞれ南北に便宜上分割し、それぞれ北側から調査を進め、南側に排土置場を設け、発掘調査を進めることとなった。重機による表土剥ぎは各調査区を南北に分け、作業進度に合わせて実施し、１区から２区へ調査地を移動する際には、発掘作業員の駐車場等の移設、造成を行っている。表土除去後、遺構検出作業や耕作に伴う攪乱土などの掘り下げは人力で行った。

調査はグリッド法を用い、各グリッドの基準杭を公共座標第Ⅴ系に基づき10m間隔で打設した。基準杭には東西軸に算用数字を東から，南北軸にアルファベットを北からそれぞれ付し、「A1杭」のように呼称した。また，これらの杭によって10m四方に区画された地区は，その北東隅の杭をもって区画名とした。

検出した遺構や遺物は、原則として光波トランシットにより記録した。出土遺物は時期判断が可能なもの等について出土位置を記録し、それ以外は遺構またはグリッド毎に一括して取り上げた。調査地での写真撮影は35mm判と６×７判フィルムを使用し、適宜デジタルカメラにより補足した。遺物写真撮影は６×７判と４×５判カメラを用い，いずれも白黒ネガフィルム並びにカラーポジフィルムを使用した。

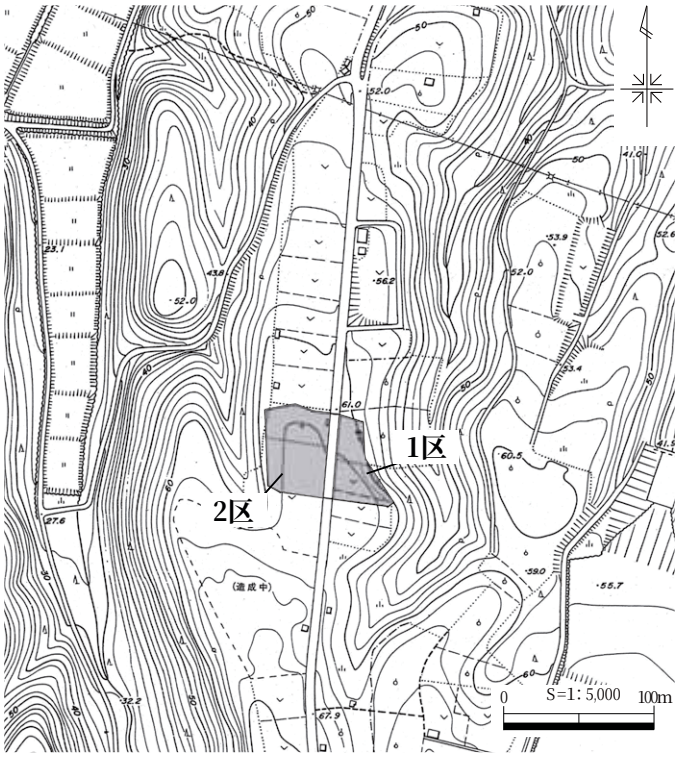
（２）調査の経過

平成17年４月12日に基準点測量及び方眼測量にかかる委託契約を締結し、調査を開始した。１区北側における表土剥ぎを４月20日から行い、本格的な遺構検出作業は航空写真撮影や休憩テントの設営など周辺整備を行った後、４月26日から開始した。

試掘調査の結果や現地の土地利用状況から予想されたように、表土剥ぎを行った段階で調査区内全域には果樹園や畑地の耕作に伴う攪乱が広がっていた。遺構検出作業を進めるためにはこれらの攪乱土の除去を行う必要があったため、作業には困難を伴った。

１区南側は６月１日から表土剥ぎを行い、遺構検出作業等の調査を開始した。

１区は狭小な面積にもかかわらず遺構密度が高い区画であり、古墳時代前期に築かれた



第２図　調査地位置図

直径約９ｍの大型住居を始め、弥生時代後期後葉から古墳時代後期に築かれた８棟の竪穴住居跡、段状遺構等が検出された。確認された竪穴住居跡等の一部は調査地外の町道下まで広がっている。また弥生時代後期後葉に築かれた建て替えを伴う焼失住居を確認し、焼失住居の調査指導を鳥取環境大学の浅川滋男教授に依頼し、６月22日に現地で指導を受けた。

８月17日から２区北側の調査に入るため、当初２区北側に設けた駐車場を調査の終了した１区南側へ移設し、表土剥ぎを開始した。２区は１区より比較的平坦な地形をなしており、当初遺構密度が高いものと予想されたが、遺構密度は１区より希薄であった。しかし、２区は果樹園等の耕作に伴う攪乱が著しく、攪乱の掘削深度も平均して40㎝に及んでおり、遺構検出作業を行う上で、その除去に多くの時間を割かざるを得なかった。

９月20日から２区南側の表土剥ぎを行った。２区では３棟の竪穴住居跡をはじめ、８棟の掘立柱建物跡、土坑等を確認した。

調査地全体の掘り下げ作業を11月22日に終了し、この後11月29日まで遺構の測量作業を行った。11月30日に現地から機材等の撤収作業を行い、現地における作業を終了した。

航空写真撮影は業者に委託し、遺構密度の高い１区について実施した。調査後の地形測量は業者に委託して行った。

調査成果は埋蔵文化財センターのホームページで速報的に紹介した。また６月７日には，安田小学校の６年生が見学に訪れたほか、東伯中山道路関係の発掘調査について紹介する「発掘調査だより」を作成し、５月から琴浦町内の小中学校に毎月配布したり、７月から琴浦町報に遺跡紹介記事を掲載するなど、地元への普及啓発活動を行った。

発掘調査報告書作成に伴う遺物の整理作業は、埋蔵文化財センター及び東伯調査事務所で行った。

（大川）

調査日誌抄

４／19　調査前空撮
４／20　１区北側表土剥ぎ
４／25　発掘調査機器の搬入
４／26　１区北側発掘作業開始
５／９　SI8（大型竪穴住居）他検出写真撮影
５／13　SI3（焼失住居）他検出写真撮影
６／１　１区南側表土剥ぎ
６／７　琴浦町立安田小学校生徒８名による遺跡見学
６／22　鳥取環境大学浅川滋男教授による現地指導
７／13　１区調査後地形測量
８／２　１区遺構全景空撮
８／17　２区北側表土剥ぎ
８／22　２区北側遺構検出作業開始
９／20　２区南側表土剥ぎ
９／22　２区南側遺構検出作業開始
11／30　現場作業終了・現場機器撤収

第３節　調査体制

下記の体制で発掘調査・報告書作成を行った。

鳥取県埋蔵文化財センター

所　　長　　田中　弘道

次　　長　　戸井　　歩（兼総務係長）

総務係

副　　主　　幹　　福田　高之

発掘事業室

室　　長　　加藤　隆昭（兼調整係長）

文化財主事　　八峠　　興

文化財主事　　湯村　　功

文化財主事　　濵本　利幸

文化財主事　　大川　泰広

調査協力

琴浦町教育委員会

（大川）

第２章　遺跡の立地と環境

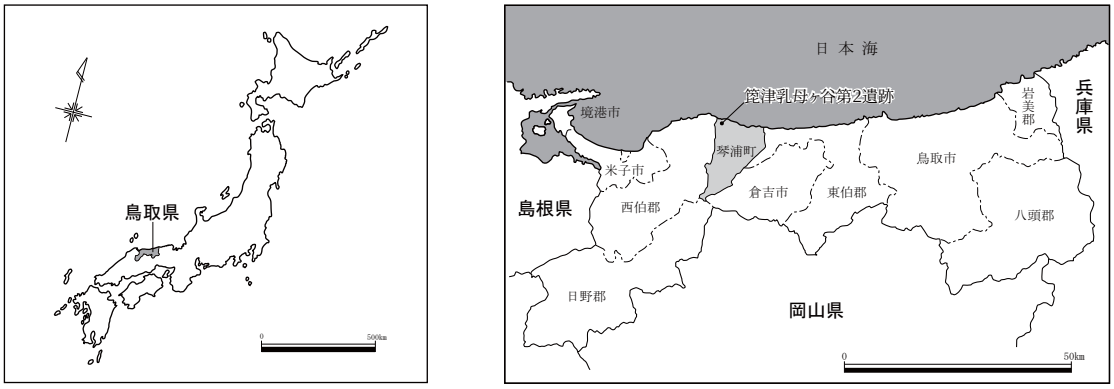
第１節　地理的環境

箆津乳母ヶ谷第２遺跡が所在する琴浦町は、鳥取県中部地域の西端に位置する。平成16年９月１日に東伯町と赤碕町が合併して新町として誕生した。県庁所在地の鳥取市からは西に約60km、県西部の商都米子市からは東に約35km離れている。町域は大山山麓から北に向かって広がる三角形状で、東は北栄町、倉吉市と、西は大山町と、南は江府町と、北は日本海と接する。東西15.2km、南北18.5km、総面積は139.88km^{2}を測る。平成17年10月末時点の人口は、20,416人である。

地勢は、大山山麓から派生する急峻な丘陵地が北に向かうほど緩やかとなり、町内を南北に流れる加勢蛇川、洗川、勝田川などの流域に平野部が広がっている。海岸線は単調であるが、良好な漁場となっている。

町の産業は日本海沿岸部と山間部、その中間部にそれぞれ特徴がある。日本海沿岸部は国道９号線沿いを中心に、地酒、地ビール、和牛といった酒造や食品製造などの商工業が盛んである。また海岸部は赤碕港を中心とした沿岸漁場が有名である。中間部は県下有数の生産、販売高を誇る農業が盛んで、二十世紀梨は海外へも輸出されている。山間部は大山滝や南北朝期の動乱を描いた「太平記」の舞台となった船上山、国指定天然記念物の伯耆の大シイなどの風光明媚な自然に囲まれ、多くの観光客が訪れている。

箆津乳母ヶ谷第２遺跡は町の北西部、旧赤碕町域に位置する。調査地東側には黒川が流れ、日本海まで直線距離で1.2km、標高約59m ～ 61mの丘陵上に立地している。（湯村）



第３図　遺跡位置図

第２節　歴史的環境

ここでは琴浦町内における遺跡の概要を述べる。

旧石器・縄文時代　鳥取県下の旧石器資料は15遺跡で確認されており、位置づけがはっきりしない尖頭器類を含めても40遺跡を数えるに過ぎない。町内では三林遺跡（６）と梅田萱峯遺跡（22）でナイフ形石器の可能性がある資料が、笠見第３遺跡（７）で細石核の可能性がある資料が、本来の位置を遊離した状態で出土している。また水溜、松谷の両地点で槍先形尖頭器が採集されている（註１）。住吉第２遺跡（99）では草創期まで遡る可能性のあるものとして、有舌尖頭器と考えられる石器が出土している。近年、隣接する大山町門前第２遺跡でＡＴ下位から小型ナイフ形石器を主体とするブロックが出土しており、良好な火山灰堆積が見られる当町域でも、今後層位的な出土例が期待される。

縄文時代については、集落像を明らかにしうる調査例は少ない。早期のものとしては、赤坂後ロ山

遺跡（93）、退休寺飛渡り遺跡（101）、上伊勢第１遺跡（２）があり、押型文土器が検出されている。中期以前では、松ヶ丘遺跡（66）、森藤第１・第２遺跡（37）、井図地中ソネ遺跡（５）、井図地頭遺跡（４）などで土器が出土している。後期段階では森藤第２遺跡と南原千軒遺跡（19）で石囲い炉をもつ竪穴住居跡が検出されている。森藤第２遺跡では、住居内から土器のほか土器片錘、打ち欠き石錘、土偶が出土している。大山町御崎第２遺跡（80）では中津式に比定される土器片や晩期の浅鉢や深鉢が出土している。住吉第２遺跡では落し穴が確認されている。この他に後期～晩期のものでは八重第１遺跡（81）、八重第３遺跡（83）、小松谷遺跡（97）、下甲抜堤遺跡（96）がある。

弥生時代　当地域の弥生開始期の様相は明らかではない。前期から中期前半の土器は丘陵上の遺跡で散見されることはあるが、近年の低地部の調査でこの時期の集落の一端が見え始めている。上伊勢第１遺跡（２）では前期の竪穴住居跡が３棟確認され、中尾第１遺跡（1）と三保第１遺跡（３）では同時期の配石墓や土壙墓などの墓域が調査されている。これらの遺跡は加勢蛇川を挟んだ沖積平野内の微高地上に近接して存在している。樋口第１遺跡（86）、三谷遺跡（89）では前期の土器片が出土している。南原千軒遺跡（19）は勝田川沿いの扇状地上に位置し、中期初頭の土器が大量に出土している。また中尾第１遺跡は中期中葉の集落でもある。

中期後半から古墳時代初頭にかけては、丘陵上を舞台として集落が大きく展開する。森藤第１遺跡（37）、水溜り・駕籠据場遺跡、大峰遺跡（38）、井図地中ソネ遺跡、三保遺跡（49）、笠見第３遺跡、三林遺跡（６）、中道東山西山遺跡（８）、久蔵峰北遺跡（10）、福留遺跡（17）など枚挙に暇がない。このように多数の住居跡が調査された例から見ると、後期半ばから後半にかけて住居等が激増する様子が窺える。

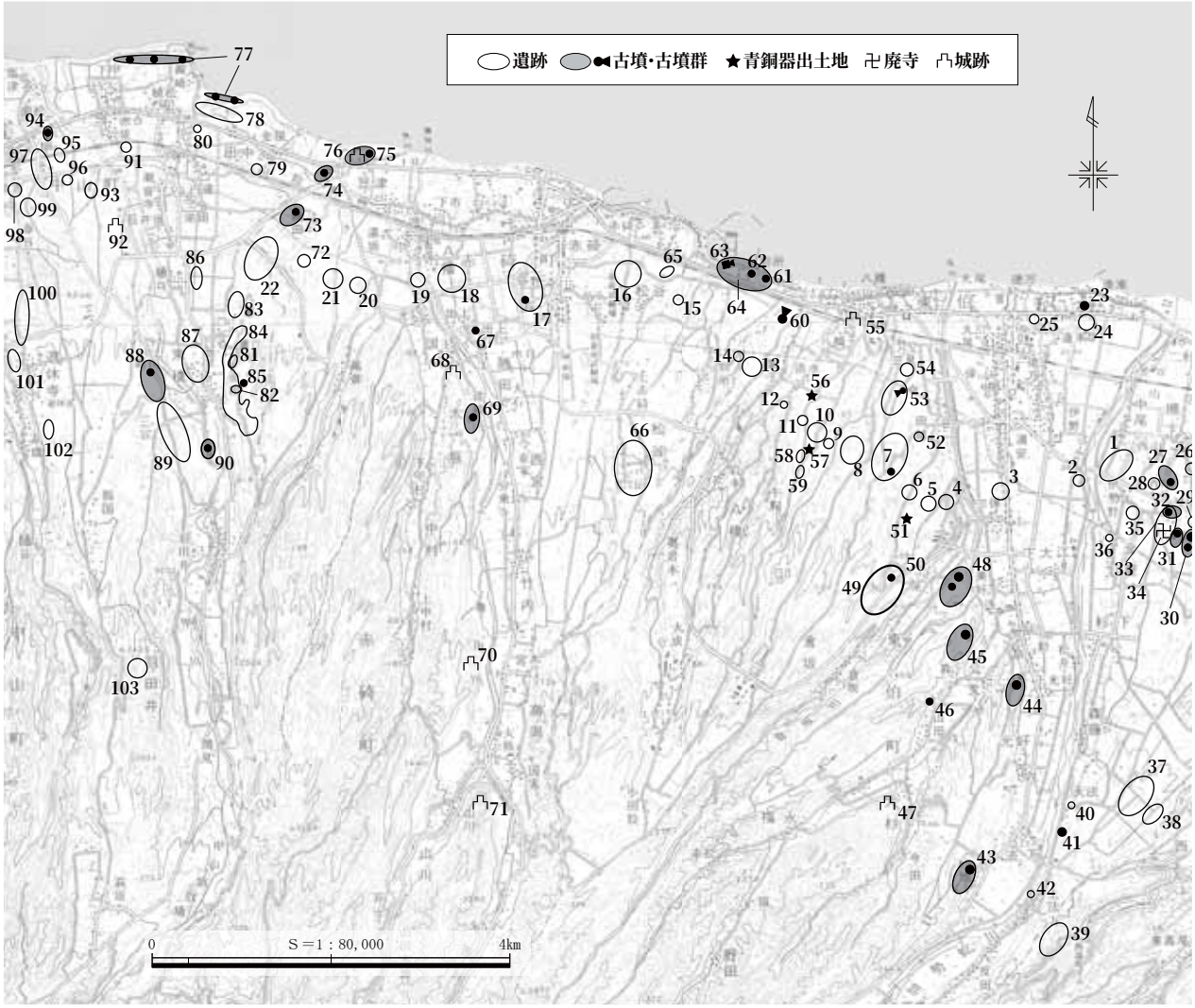
各種生産に関しては、玉作遺跡の調査例が増えている。笠見第３遺跡、久蔵峰北遺跡では後期の玉作工房が検出されている。笠見第３遺跡では後期前半に属する管玉素材のひとつに島根県花仙山産の緑色凝灰岩が使用されていることが判明したほか、管玉の穿孔に鉄針が用いられていたことがわかる例もあった。笠見第３遺跡、久蔵峰北遺跡ともに後期段階では施溝分割は行わず、打撃分割によっている。

墳墓では墓ノ上遺跡（65）、別所女夫岩峯遺跡（61）で中期の木棺墓が見つかっている。湯坂遺跡（20）では後期の小型の墳丘墓を増築した例があり、山陰地方では珍しい鉄石英製の管玉が副葬されていた。井図地中ソネ遺跡では弥生時代終末から古墳時代初頭の区画溝を伴う土壙墓群が検出されている。

町内では銅鐸、銅矛、銅剣が出土している。八橋では扁平鈕Ⅰ式銅鐸のほか、同一丘陵で銅矛も見つかっている。また田越では円墳の箱式石棺下30cmの位置から中細形銅剣が４本出土している。

古墳時代　町内には４基の前方後円墳がある。別所１号墳（笠取塚古墳、53m）（63）、八橋狐塚古墳（町史跡、62m）（60）、大塚古墳（34m）、竜ヶ崎３号墳（21m）（48）で、このうち前期に属すると思われるのは別所１号墳である。

中期から後期にかけては群集墳が築かれる。大高野古墳群、塚本古墳群（31）、斎尾古墳群（32）、公文古墳群（45）、竜ヶ崎古墳群（40）、別所古墳群（64）、箆津古墳群（75）、坂ノ上古墳群（74）、梅田古墳群（73）などである。大高野３号墳では金銅製耳環、青銅製鈴、鉄刀などが副葬されていた。後期以降採用される横穴式石室には、大法３号墳、三保６号墳などのように竪穴系横口石室と呼ばれる構造をもつものがある。槻下古墳群、大高野古墳群、塚本古墳群、斎尾古墳群など後続する石室形



1．中尾第１遺跡、2．上伊勢第１遺跡、3．三保第１遺跡、4．井図地頭遺跡、5．井図地中ソネ遺跡、6．三林遺跡、7．笠見第３遺跡、8．中道東山西山遺跡、9．久蔵谷遺跡、10．久蔵峰北遺跡、11．蝮谷遺跡、12．岩本遺跡、13．八橋第８・９遺跡、14．別所中峯遺跡、15．松谷中峰遺跡、16．化粧川遺跡、17．福留遺跡、18．八幡遺跡、19．南原千軒遺跡、20．湯坂遺跡、21．箆津乳母ヶ谷第２遺跡、22．梅田萱峯遺跡、23．逢束双子塚古墳、24．逢束遺跡、25．逢束第２遺跡、26．槻下豪族居館跡、27．槻下古墳群、28．下斎尾２号遺跡、29．大高野遺跡、30．大高野古墳群、31．塚本古墳群、32．斎尾古墳群、33．下斎尾１号遺跡、34．斎尾廃寺、35．伊勢野遺跡、36．金屋経塚、37．森藤第1･2遺跡、38．大峰遺跡、39．西高尾谷奥遺跡、40．大法古瓦出土地、41．大法３号墳、42．上法万経塚、43．杉地古墳群、44．下光好古墳群、45．公文古墳群、46．山田１号墳、47．妙見山城跡、48．竜ヶ崎古墳群、49．三保遺跡、50．三保６号墳、51．田越銅剣出土地、52．田越第４遺跡、53．笠見第２遺跡・笠見１号墳、54．笠見第１遺跡、55．八橋城跡、56．八橋銅鐸出土地、57．久蔵峰銅矛出土地、58．八橋第２遺跡、59．八橋第４遺跡、60．八橋狐塚古墳、61．別所女男岩峯遺跡、62．別所２号墳、63．別所１号墳（笠取塚古墳）、64．別所古墳群、65．　墓ノ上遺跡、66．松ヶ丘遺跡、67．出上岩屋古墳、68．條山城跡、69．太一垣古墳群、70．大仏山城跡、71．山川城跡、72．梅田所在遺跡、73．梅田（栄田）古墳群、74．坂ノ上古墳群、75．箆津古墳群、76．箆津城跡、77．御崎古墳群、78．御崎第１遺跡、79．田中川上遺跡、80．御崎第２遺跡、81．八重第１遺跡、82．八重第２遺跡、83．八重第３遺跡、84．八重第４遺跡、85．岩屋平ル古墳、86．樋口第１遺跡、87．樋口第２遺跡、88．三谷古墳群、89．三谷遺跡、90．束積古墳群、91．赤坂大五輪塔、92．岩井垣城跡、93 赤坂後ロ山遺跡、94．曲松古墳群、95．林之峯遺跡、96．下甲抜堤遺跡、97．小松谷遺跡、98．住吉第１遺跡、99．住吉第２遺跡、100．退休寺遺跡、101．退休寺飛渡り遺跡、102．退休寺第１遺跡、103．羽田井遺跡

第４図　周辺遺跡分布図

態もその系譜に連なるものであることから、加勢蛇川流域に石室形態を同じくする集団が存在したことを示している。終末期に属すると思われる切石積石室は山田１号墳（町史跡）（46）、出上岩屋古墳（県史跡）（67）に認められる。

集落の様相は不明な部分が多い。三保遺跡、上伊勢第１遺跡、笠見第３遺跡、蝮谷遺跡（前期から後期）（11）三林遺跡､久蔵峰北遺跡（前期から中期）､中尾第１遺跡､三保第１遺跡､松谷中峰遺跡（中期）（15）、井図地中ソネ遺跡（中期から後期）、別所中峯遺跡（前期と後期）（14）など集落遺跡の調査例は多いが、実態は必ずしも明らかではない。そのような中で注目されるのは八橋第８・９遺跡である。ここでは６世紀から７世紀代の竪穴住居跡23棟などが調査されたほか、椀形鍛冶滓や流動滓も出土しており、報告では遺跡内での土器編年に基づき、集落動態の解明に取り組んでいる。

古代　町内には山陰地方唯一の国特別史跡である斎尾廃寺がある。金堂や塔、講堂跡が残り、これら

を取り囲む土塁状の高まりも存在する。伽藍配置は法隆寺式である。斎尾廃寺が位置する加勢蛇川右岸は伯耆国八橋郡の中心地であったと推定され、近くには出土した炭化米を根拠に正倉または郷倉と考えられる総柱礎石建物群がある大高野遺跡や伊勢野遺跡、水溜り・駕籠据場遺跡といった掘立柱建物群や墨書土器を伴う遺跡がある。やや南には墨書土器や金属器写しの須恵器が出土した森藤第１・第２遺跡、大法古瓦出土地がある。このほか、旧箆津郷に位置する八幡遺跡では掘立柱建物群や赤色塗彩土師器が多数出土している。大山町田中川上遺跡（79）では埋没河川が確認され、その川辺の一部から須恵器や赤色塗彩の土師皿などが集中して投棄された状態が検出されており、河川の畔での祭祀行為が想定されている。

墳墓の関係では、笠見第３遺跡と三林遺跡で火葬墓が見つかっている。笠見第３遺跡では土坑を掘り蔵骨器と考えられる土師器坏と火葬骨を木櫃に納めていた。三林遺跡では土坑を掘った中に石槨を設け、その中に土師器を組み合わせた蔵骨器に火葬骨を納めていた。金屋と上法万では経塚が見つかっており、金屋では銅経筒が納められていた。御崎24号墳では墳丘斜面において銅銭160枚以上が検出された土葬墓が確認されている。

生産関係では、上伊勢第１遺跡で９世紀から13世紀と考えられる畠跡が見つかり、中道東山西山遺跡では９世紀代に位置づけられる鍛冶炉などの鉄関連遺構や遺物が検出されている。

中世　南原千軒遺跡では平安後期の鍛冶関連遺構や遺物が大量に出土した。鍛冶炉や廃棄土坑のほか鉄滓や鍛造剥片などの微細遺物も豊富で、鉄素材から製品まで生産していたと考えられる。

井図地頭遺跡では平安時代末頃の方形区画溝が検出されている。内部には道路状の硬化面や礎石とおぼしき礫があり、居館跡の可能性がある。槻下館跡（町史跡）は40m四方の主郭のほか、周囲に土塁や壕を巡らせた郭をもつ複郭式と考えられる。鎌倉時代に岩野弾正の居城であったと伝えられるが詳細は不明である。

町南部には標高615mの船上山がそびえる。ここには南北朝期に後醍醐天皇が隠岐から逃れた行宮跡（国史跡）がある。赤碕港から船上山にかけては、鎌倉末期と推定される、宝塔と宝篋印塔の二様式を合わせもつ独特の形態の赤碕塔（県保護文化財）があることでも知られている。大山町赤坂集落には、赤坂大五輪塔（91）がある。元弘３（1333）年、後醍醐天皇を迎えて鎌倉幕府方と戦った船上山合戦の際に、名和軍に加勢したといわれる土豪赤坂掃部助幸清の墓と伝えられる。赤坂掃部助幸清は1336年に京都で没している。

中世城館は町内各地に見られる。南北朝期に西伯耆で勢力をもっていた行松氏が築城し、後に毛利氏が支配し伯耆の経営拠点となった八橋城跡（町史跡）（55）、天正年間の築城と考えられる妙見山城跡（47）、土塁と堀が残る町史跡の箆津城（槇城）（76）跡のほか、條山城跡（68）、大仏山城跡（70）、山川城跡（71）がある。大山町では、岩井垣城（92）がある。丘陵の南北を分断する空堀や土塁、石段がよく残されている。延文年間（1356 ～ 1360）に国人領主であった、箆津豊後守敦忠の居城として伝わる。また、箆津豊後守敦忠は1357（延文２）年に曹洞宗の金龍山退休寺を開基したとされており、金龍山退休寺は近世に至って曹洞宗の大寺院として隆盛を極めた。当時の汗入群方面と八橋群方面の参詣道があり、現在はその一部が町道として痕跡を留めている。　（湯村・淺田）

註１　水溜は槻下、松谷は松ヶ丘と呼ばれることもあるが、下記文献に基づき名称を統一した。

根鈴輝雄1991「鳥取県の旧石器研究」『島根考古学会誌』第８集

発掘調査報告書類については割愛させていただいた。